

第二条 声のつかひ様の事 付、出声散の方

底本・高知本 対校本・鴻山本・演博本

【翻刻】

第二 声のつかひやうの事 付 出声散の方

声ハ不断つかふて尤よし。其内寒中につかふ事を專一とす。意趣いかんとなれハ、木火土金水五行相尅相生の理にあたり。人の肺の①蔵ハ諸声の奉行するものなり。肺ハ金也。扱冬ハ腎にて水の時也。金生水とて水は金の子なり。肺金ハ水の母なるによつて、つねに肺より水へ合力する事也。しかれとも冬ハ水の②旺をする時なれハ、水さかんにして、母の金よりも合力を③（不_レ請。さるにより、肺金子の水に合力）せぬゆへ、常よりもさかんなり。肺気さかなれハ多声しても肺気④つかれず、肺の慥成時に、つかひを、せんためなり。扱つかひやうに様々の説あれども、只高音下音に不限其人相応の調子のま、につかひてよし。下音の人も少づ、高音につかひぬれハ、いとなく⑤高音になる事也。其子細ハ常にハ調子のひくき人も、敵ともあらず時ハ、次第に⑥声高なる事同前也。但生れなからにして、肺気の⑦よハき人ハ元来声わざを好まぬもの也。好まずして声つかひたりとてよくなり申へき道理なし。うたふ時ハ立居ともに、身をすへて臍の上下両辺より声を取り出し、音のきんかうへにてつけてうたふへし。礼記疏に、単に出るを声と云雜⑧出る音と云。

食物宜禁

大根、独活、牛房、大麦、⑨栗、薑、蠣、鮑
用てよろし

蕎麦、桃、杏、枇杷、胡椒

真爪、鮒、鮎、鯨

用てわろし然といへとも上音達者⑩不用。

①ユツセイサン
出声散

⑪連堯 桔梗一兩宛 川芎一兩 砂仁一兩 訶子一兩 薄荷二兩 乾薑三兩 甘草三兩

一、連堯 白水にてよくあらひ用。

一、桔梗 白水にてよくあらひ、かしらをさり用。

一、川芎 半時程白水にひたしよく⑫洗い、きさみ、日に⑬ほし用。

一、砂仁 白水にてよく⑭あらひ、すこし火にている。

一、訶子 紙につ、ミ、あつはいの中に暫置て取いたし、さねを去て水にあらひ、日にほす。

一、薄荷 其ま、おろす。

一、乾薑 白水に付てよく洗、日にほし用。

一、甘草 かわを去、其ま、用。

右八味、細末して、散薬丸薬何れにてもよし。声のかれたる時、大きによし。あつき湯にてのミくたすへし。秘薬なり。

【校異】

- ① 蔵―臓 (鴻)
- ② 旺―王 (鴻・演)
- ③ 高ナシ。鴻・演より補う。
- ④ つかれす―つかれず (鴻・演)
- ⑤ 高音―高声 (鴻・演)
- ⑥ 声高なる―声高くなる (鴻・演)
- ⑦ よハき―よわき (鴻・演)
- ⑧ 出る音―出るを音 (鴻・演)
- ⑨ 粟―粟 (鴻・演)
- ⑩ 不用―不用_レ之 (鴻・演)
- ⑪ 連堯―△連堯 (鴻・演)
- ⑫ 洗イ―あらひ (鴻・演)
- ⑬ ほし用―ほして用 (鴻・演)
- ⑭ あらひ―あらひて (鴻・演)

【現代語訳】

第二 声の使い方について 付、出声散の処方

声は常に使うのが最も良い。中でも寒中に使用することが第一である。理由はというと、木火土金水の五行相克相生の理論に基づくからである。人間の肺臓はあらゆる声を管理する。肺は金である。ところで、冬は腎であり、水の時期に金は水を生ずるから、水は金の子である。肺すなわち金は水の母なので、常に肺は水を助ける。しかしながら、冬は水が支配する時期であるから、水の勢い強く、母の金に助けを求めることは無い。このようなわけで、肺すなわち金は子である水を援助しないので、いつもより勢力がある。肺臓の勢いが良いと、多く発声しても肺臓が疲れない。肺に活力がある時に、十分多めに使っておきたい。

さて、使い方にさまざまな説があるが、大声、小声に限らず、人それぞれの調子に合わせて使用して差支えない。小さい声の人も、すこしずつ大きな声を使っていれば、いつの間にか大声が出る。説明すると、いつも小声の人も、敵かたきと争う時には徐々に声高になることと同じである。ただし、うまれながらにして肺臓の弱い人は、そもそも声の芸を好まないものである。いやいや声を使っても、良くなるわけが無い。謡う時は立っていても座っていても、体を据えて臍の上下両辺から声を出し、音の響きは「体の」上部で調整して謡う。

礼記疏によるならば、単一に出るのを声と言ひ、混じつて出るのを音と言ふ。

食物宜禁（食べて良いものと悪いもの）

大根、ウド、ごぼう、大麦、粟、生姜、牡蠣、鮑

これらはそれなりに食べて良い。

そば、桃、杏、琵琶、胡椒、まくわうり、フナ、アユ、クジラ

これらは控えることが望ましく、上音が達者な人は特に食べない。

出声散

連翹、桔梗一両ずつ 川芎一両 砂仁一両 訶子一両 薄荷二両 乾姜二両 甘草三両

連翹 清く澄んだ水でしっかりと洗って使用する。

桔梗 清く澄んだ水でしっかりと洗い、茎を除いて用いる。

川芎 一時間ほど水に浸し、良く洗って刻み、日に干して使用する。

砂仁 清く澄んだ水でよく洗い、少し火でいる。

訶子 紙に包み、熱い灰の中にしばらく置いて取り出し、実の中の胚を取って水で洗い、日に干す。

連翹 そのままおろす。

乾姜 清く澄んだ水につけてよく洗い、日に干して使用する。

甘草 皮を取り、そのまま用いる。

右の八種は、細かく砕いて粉薬・丸薬、どちらにしてもよい。声のかれたとき大いに良い。熱い湯で飲み下してください。秘薬である。

【解説】

声楽において発声法の重要性はいくら強調してもしすぎることはないが、呼吸法や口や喉を調節して多彩な音を作り出す方法を言葉で説明することは極めて難しい。おそらく本章はこれを踏まえてのことだろう、発声の技法の詳述というよりも、理論や一般論の概説に力点を置いた発声法の記述が試みられる。まず、「声は常に使うのが一番よく、とりわけ寒中に使うことを最上とする」という大原則から切り出して五行思想による理論づけが試みられ、次いで、自分の声に合わせて謡うのが望ましく、意識して負荷をかけると声域・音量が拡がるという説が引か

れ、発声法が簡潔に示された後、礼記の解釈を用いた理論づけで締めくくられる。

五行思想に関する理論的な議論は過去の伝書等を参考に執筆したと考えられる。出版が前後するので直接の影響関係を指摘することは出来ないが、冒頭から、「次第に声高なる事同前なり」までの記述が『音曲玉淵集』「一声のつかひやうの事」にほぼ等しい。ただし、両者における発声法と鍛練法の記述は異なる。『音曲玉淵集』は声の横堅に関する議論を展開する一方で、『うたひ鏡』は具体的な発声に関する身体技法を示す。また、『音曲玉淵集』は鍛練法が詳述されている一方で、『うたひ鏡』はこれを欠く。声の横堅や鍛練法の記述は『八帖花伝書』にも見出される。これらの説は広く江戸初期に流布していたと考えられ、『うたひ鏡』の著者は、実践的な記述を目指すかゆえに、声の横堅に関する議論を知りつつ省略したのではないだろうか。取捨選択を通じて著者の主張が浮かび上がる。

発声法は次のように示される。「うたふ時ハ立居ともに、身をすへて臍の上下両辺より声を取出し、音のきんハうへにてつけてうたふへし」。寸言で示したのは、これを暗記して身体化することを狙ったのかもしれない。記述は二段階からなり、まず、腹式呼吸による声の出し方が示され（臍の上下両辺より声を取出し、次いで声の調節の方法が示される（音のきんハうへにてつけてうたふ）。「うへにて」は、体の上部に位置する喉頭を意味すると考えられる。また、「きん」は、宝暦一二年に出版された『音曲玉淵集』によると、強吟、弱吟等、音声の調子と解される。

発声法に関する寸言には、礼記の疏が続く。「単に出るを声と云。雑出る音と云」。疏は鄭玄による礼記冒頭の注「宮商角徵羽雜比曰音、単出曰声」（四〇五頁）に類似する。鄭玄の注の文章から「宮商角徵羽」を取り去り、「雑比曰音」と「単出曰声」を入れ替えるとはほとんど同一の文章になる。『うたひ鏡』の著者は、「臍の上下両辺より」取り出された声を、未分化ゆえに「単」、「うへにて」吟の付けられた声を、謡曲の楽理に基づいて調節されているので「音」と理解したのではないだろうか。（全ての『礼記』の引用は、『全釈漢文大系』所収の「礼記」によ

る。この書物の底本は、一八一五年（清の嘉慶二十年）に南昌府学から刊行された『十三經注疏』本、いわゆる阮元本である）。

本章は本文に続けて、謡曲を謡う人のための食事のガイドライン並びに喉薬の調剤及び処方が付されている。謡の技法書に医学・薬学は似つかわしくないように思われるが、実用を考えて言及したのかもしれない。あるいは『うたひ鏡』の著者にとって音曲と本草学というカテゴリーは、現代の私達が馴染む音楽と医学というカテゴリーよりも隣接していたのかもしれない。

食事のガイドラインは、「よろし」の食材一覧と「わろし」の食材一覧から成る。「よし」、「あし」ではなく、「よろし」、「わろし」なので、「無理のない範囲で心がけて下さい」程度と理解できる。「上音達者」の解釈は難しい。一七世紀の人々は音をどのように聴いたかという問題に関わってくるからである。

現在の私たちは音を「高い音」と「大きい音」に区分する。ごく当たり前のことだが、近代以前には両者ははつきりと区別されていなかった。「高音」は「高い音」ではなく、むしろ「大きな音」と解されていた。声高に話すという表現が必ずしも高い声で話すことを意味しないことは、その名残である。本訳では便宜的に音の高低に関わる表現を、すべて音の大小で処理した。さらにふさわしい表現も予想されるだろう。今後の検討が求められる。

後半部は喉薬の処方が記されているが、喉薬への言及は早くも世阿弥の『音曲口伝』に見出される。「一、声をつかふ事。声の向きたる時を失はじとつかふべし。声の薬などと申ことも、つかひたる後に薬を飲むべし。是、声のよくなる相なり」。もっとも、薬の処方は異なる。『音曲口伝』は声を良くするための滋養強壯薬である一方、『うたひ鏡』はむしろ「声のかれたる時」に使用する治療薬である。また、『音曲玉淵集』にも「声のつかひやうの事」の項目に「薬を吞て吉」と記されている。江戸時代を通じて広く普及した小謡集の頭書にも調剤についての知識が見出されるものがあり（『万歳小謡昇平楽』資料参照）、謡による発声障害は昔からそれほど珍しいものではなく、喉薬を調剤して服用することも古くから広く行われていたらしい。

【資料】

一、声ノ薬ニハ、正気散ヲ用キラレキ。味噌氣・油氣、コトニ嫌ハル。当场ニテハ、タゞ沸リ湯ヲ飲ミテ、咽ヲ焼クガヨキトテ、イズレモ用ラレシ也。幕屋ニテハ、重湯殊勝ノモノ也。

頭注に「当场 能の直前や演能の最中」という記載がある。

「申楽談義」『世阿弥 禅竹』表章・加藤周一校注、岩波書店、一九七四年、三二一頁。

一声のつかひやうの事

声は常につかふて吉其内寒中につかふ事を専一とすいかんとなれば肺の臓は五臓の花蓋諸氣の元なりといふ五行に配しては肺の臓は金。腎は水なり金生水の道理にて腎の為に肺は母なり故に常に肺より腎へ水を合力するなり然れとも冬は水の主る時にて水盛んなり故に肺より合力を請す依之常よりも肺氣盛んなれば多声しても肺氣つかれず肺腎ともにさかん成内につかひおふせん為に寒こゑとて充分つかふ事也扱つかひやうさまく申伝へ是ありといへとも其人相応の調子にて高音低音とも自由なるやうにつかふてよし低音の人も少つ、高音につかひぬれはいつとなく高声に成ものなり常に調子ひき、人も敵と物諍ふ時は次第に声高く成る目前なり尤其人の声のむきにもより又氣力にも依へし先横の声をたすけ豎の声を少押てつかふへし横豎ともにある声を相音といふ也兎角声のむきたる時失はじとつかふへしこゑをつかふて能声有声につかハれて能声有へし晧声をつかふてハ少食を用ゆる歟薬を吞て吉扱又つかふて寝る事有へからすいぬれハつかふたるこゑもとる也寒中毎日毎夜つかふ時は声囁る、とも春に至りほっこりと能出るなりつよくなる、程能出る物なり返すく声の出所つかひ所を能吟味してつかふへし出所仕ひとこゑ悪ければ無益の事に也なり殊更若輩の人取わき声の変る堺を専らに遣うへし但生得肺氣の弱き人ハ一向声わざを好まぬ物なり。

『音曲玉淵集 三』時中庚安編、今村義福補、大和田建樹訂、江島伊兵衛、一八九九年、二五—二七頁。

一、声をつかふ事。声の向きたる時を失はじとつかふべし。声の葉などと申ことも、つかひたる後に葉を飲むべし。是、声のよくなる相なり。

声をつかふ事、其声の向きによるべし。又、気力にもよるべし。横の声をば助けてつかひ、主の声をば押してつかふべし。声につかはれてよき声あり、声をつかひてよき声あるべし。横・主ともにある声を相音とは申なり。

宵・暁の事。宵に物数をつかひて〔暁〕はすこし少なくつかふべし。殊更、横の声をば、暁には、声につかはれて、声をいたはりて、納め声を本につかふべし。返々、声の向きたると思はん時を失はじとたしなむべし。

〔音曲口伝〕『世阿弥 禅竹』表章・加藤周一校注、岩波書店、一九七四年、七六頁。

一 声を使ふ事。声の向きたる時を失はじと、〔使ふべし。〕声の葉など、申たるも、使ひたる後に、葉を飲むべし。是、声のよく成嗜み也。声を使ふ事、其声の向きによるべし。又、気力にもよるべし。横の声をば助けて使ひ、豎の声をば抑して使ふべし。声に使はれて、よき声あり。声を使ひて、よき声あるべし。横豎ともにある声を、相音とは申なり。宵暁の事。宵には物数を使ひて、暁にすこし少く使ふべし。殊更、横の声をば、暁は声に使はれて、声を勞りて、おさめて、声を本に使ふべし。返々、声の向きたる時を失はず使ふべき物なり。声を使ふには、宵に曲舞五つばかり〔地声にて謡ひ、おさめに小謡五つばかり〕調子高く謡、暁、又、地声に曲舞三つ四つ謡、おさめに、調子を上げて、小謡三つ程高く謡ひ、さて、何にても食をそと用ゆべし。さなく候へば、使ひ候声、返り候ものなり。食を用るも秘事なり。五十日ばかり続けて使ひ候へば、声潤る、物也。其時、声を使ひ抜き候へば、能声になり候なり。声の一稽古と申は、夏百日、寒三十日、これを言ふ。取分け、冬のうち、本なり。

〔八帖花伝書 八卷〕『古代中世芸術論』林屋辰三郎編、岩波書店、一九七三年、六五七頁。（底本は早稲田大学演

劇博物館所蔵の慶長・元和頃刊行と推定される古活字版の第一種本による。

宮商角徵羽雜比曰^レ音、単出曰^レ声——中略——変成^レ方、謂^二之音^一。

市川亨吉、今井清、鈴木隆一『礼記 中 全釈漢文大系 第十三卷』全釈漢文大系刊行会編、集英社、一九七七年、四〇五頁。

音と声の概念の考察は次の文献を参照。中小路駿逸「言語と文字と音楽と」『アジア文化学科年報』九 追手門学院
大学文学部アジア文化学科、二〇〇六年、一六一—二四頁。

一生れつきて声の無にあらざ病によつてこゑのいでざるに妙薬

桔梗二両 乾姜一両 烏梅五分 甘草五分

右粉にして懷中にたしなミつねにさゆにてもちふべし

○謡おほくうたひて声のつぶれていでざるバ

破笛丸

連翹二両五分 桔梗同 川芎一両五分 砂仁一両、訶子同 阿仙薬二両 薄荷四両 大黄一両五分 甘草一両五分

右細末してたまごの白ミに●「直径六ミリの円」これほどに丸じ每晚寝しなに一粒づゝ口にくくミてのミ下へし

○痰咳にて声のいでざるにハ訶子散よろし

訶子散

訶子 杏仁 貝母 甘草 各兩

右粉にしてしやうが湯にてのむべし又梨子汁一椀のむも妙之

一生れほれて吾の憂
 よわげ病すしめて
 こゑのいでぶふ妙薬
 桔梗 乾姜 烏梅 甘草
 右粉にして懐けたら
 かしほ粉ささゆそ
 りんご
 ○ 傷あかしくはひて
 のまづいてでぶふ
 被筒丸
 連翹 桔梗 川芎 砂仁
 訂子 芍薬

『万歳小謡昇平楽 全』 靖中庵桃溪画、高橋平助、享和二年（一八〇二年）、三丁裏（個人蔵）

萬壽 大黃
 甘艸 一匁
 右細末したまごの白
 毎飲寝ふに粉
 ○ 瘡あかしくはひて
 訂子 散 杏仁 貝母 甘草 各
 右粉にしてまを湯
 又梨子汁一匁のむも妙

『万歳小謡昇平楽 全』 靖中庵桃溪画、高橋平助、享和二年（一八〇二年）四丁表（個人蔵）

『万歳小謡昇平楽 全』 靖中庵桃溪画、高橋平助、享和二年（一八〇二年）、三丁裏—四丁表。（個人蔵）。

（上野正章）

